



## 野村幸世さん

Nomura Sachiyo

東京大学大学院医学系研究科消化管外科学准教授

1963年東京生まれ。89年東大卒。98年同大院修了。米国ヴァンダービルト大留学、東大附属病院胃・食道外科講師などを経て、2007年より現職。同院がん相談支援センター長兼任。日本外科学会女性外科医支援委員



## 「女性医師のキャリアを生かさないのは社会の損失」

未だに男性医師の割合が他大学より高めの東大で、女性外科医の草分けとして、胃がんの外科治療に携わってきた。日本外科学会の女性外科医支援委員を務め、女性外科医のキャリア継続支援、地位向上にも取り組む。

「私が医師になった頃は、『外科に女はいらない』と豪語する教授も珍しくなかったのですが、女性だからといってできない手術はないですし、外科医の仕事に性別は関係ありません。男性医師も家事、育児、介護などをこなしながら働けば、医師として患者さんの生活面や社会的背景への理解も深まるはず。性別を問わず、外科医が仕事と育児や介護を両立できる環境の整備が不可欠です」と語る。

2002年から3年間の留学中は、研究環境が充



留学中の2004年、ヴァンダービルト大のジム・ゴールデンリング教授と。現在も共同研究を行う

実しているだけではなく、女性の登用が進む米国社会の洗礼を受けた。「米国では、人材を生かす理念が社会全体に浸透していて、能力や経験がある人を活用しないのは社会の損失と考えます。日本でもそういった考え方が広がらなければ、出産後仕事を辞める女性は減らないし、医師不足も解消しないのではないのでしょうか」



野村さん自身、2児の母。外科医の夫と二人三脚で子育てと家事をこなし、臨床の傍ら、胃がんの発がんメカニズムの解明や、がんの早期発見につながるバイオマーカーの研究にも力を入れる。2013年には、「血清TFFを用いた胃がんスクリーニングの可能性の検討」をテーマにした研究で、日本消化器癌発生学会大原毅賞を受賞した。

「外科医になってわかったのは、完璧な手術をしても助けられない患者さんがいることです。バリウム透視や内視鏡検査よりも簡便かつ確実に胃がんの早期発見ができるバイオマーカーを開発し、手遅れで見つかる患者さんを減らしたいですね」

外科医であり研究者、子どもの前では母親とさまざまな顔を持ちながら、仕事に全力投球する野村さん。1人でも多くの命を救うべく、「今後は、手術ができない状態で見つかった胃がんの患者さんに対する治療の開発もしていきたい」と研究への熱い思いも育んでいる。